

教师用书

第三册

# 日本語

## 听力

华东师范大学日语学科组集体编纂

主 编	陆留弟	
编写者	王丽薇	王建英
(按姓氏笔	刘 杰	乔 颖
划排列)	杜 勤	沙秀程
	李道荣	沈丽丽
	吴素莲	连小燕
	陆留弟	姜晓颖
	高 宁	徐敏民
	徐海明	彭 瑾

华东师范大学出版社

### 图书在版编目(CIP)数据

日语听力. 第三册/陆留弟主编. —上海: 华东师范大学出版社, 2000

教师用书

ISBN 7-5617-2205-2

I. 日... II. 陆... III. 日语-视听教学-高等学校-教学参考资料 IV. H369.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2000)第 06791 号

策 划 陈 朴 陆留弟 陈丽菲  
责任编辑 陈丽菲  
封面设计 黄惠敏

### 日 本 语 听 力

教师用书·第三册

陆留弟 主编

---

华东师范大学出版社出版发行  
(上海中山北路 3663 号 邮政编码 200062)

新华书店上海发行所经销

南京理工排版校对有限公司照排

上海新文印刷厂印刷

开本 787×1092 1/16 印张 9 字数 139 千字

2000 年 10 月第 1 版 2004 年 3 月第 2 次印刷

印数 3 501 - 5 600 本

---

ISBN 7-5617-2205-2/H·151

定价: 14.50 元

# 出版说明

随着我国对外交往的扩大,国内对多种语言交流的需求明显增加,日语在政治、经济、文化等领域中的使用也日益频繁。为适应这种情况,我们规划出版一套《日语听力》教材,并委托华东师范大学外语学院日语系编写。本教材被列入国家九五音像制品重点出版规划。

《日语听力》是配合大学日语专业一至四年级精读课本教学所使用的配套听力教材,共分4册。每册又分教师用书、学生用书,每册学生用书配录音磁带。各册设分册主编,主持编纂事宜。接受编写任务的教师们对于本教材的编写,倾注了极大的热情。他们在多年从事日语教学的基础上,参考东京外国语大学等日本高等学府所编写的母语教育读本,翻阅了大量的资料,对本教材的编纂和听力内容的编排提出了不同于现行一般教材编写的全新思路。其特点之一,在于突破了援用现成的日语出版物进行作业的通行编写模式,所用范文多由编写人员根据需要编撰,体现了较高的独创性。特点之二,是教材的听解内容准确地把握了中国学生较难掌握的薄弱环节以及日语特有的语音、语言现象,在设计上注意切合日本实际社会生活场景,语言真实度较高,从而最大限度地实现了教材与日本现实生活的磨合。特点之三,表现为设问方式灵活多变,注重学生综合听能的提高,同时启发学生用日语思考、解答问题,培养学生的日语实际应用能力。这些努力都是力求使本教材更好地体现实用性、准确性和时代性。

本教材的编写得到了日本国际交流基金会日语国际中心的支持和资助,使第一、二册的编写人员能赴日就教材的编写,与日本国内一流语言机构的专家、学者进行切磋,并在他们的帮助下逐字逐句地修改、审定教材内容。可以相信,本教材无论内容还是形式都会达到国内最好水准。在此,我们对全体编写人员,对日本有关机构、学校和专家,表示深深的敬意和衷心的感谢!

本教材将于2000年出齐。我们诚挚地希望从事日语教学和研究的专家、学者以及广大读者对本教材提出宝贵意见,以便我们不断改进,精益求精。

华东师范大学出版社

1998年5月



# 前 言

本书是华东师范大学日语系全体教师参与编写而成的第三册《日本语听力》教材。要编写好一套无论从水准、质量、知识、趣味以及独创方面均高出于国内同类作品的较为全面、系统的听力教材,必须强调认真调查,集思广益,仔细揣摩,精益求精。取其上也许只能得其中,但我们确实始终以此自励。

如同学习外语的五项技能(听、说、读、写、译)中最先强调的那样,听觉能力的强弱自始至终制约着一个专业外语学习者综合能力的发展,特别表现在对所学语言知识的认知方面。基于此,第三册规划了不同于以内容和知识宽泛性为主的编写方针,侧重于对所学语言知识的认知,即设定好在日语精读课或语法课中所涉猎的诸如寒暄词、尊敬词、惯用词、象声词、色彩词、同音词、反义词、合成词、副词、流行词、外来词、暧昧词等的“关键词”,试编一册通过听觉训练达到认识和理解语言知识本身的听力教材。此类听力教材,目前国内尚无出现,故此举不失为一种先行的“尝试”。

本册的主要特色如上所述,把日语中的一些基本的语言知识通过“一问一答”这一极其生动的对话形式和逼真的语言表达融会贯通起来,使得听者在学习过程中有一种既轻松又紧张的感觉。全书共分 20 课,每一课先出现围绕本课内容的“边听边记”的背景知识,然后是围绕某一专题的课堂讨论,以便最大程度地实现听、说结合。接下去即为本课内容的重要组成部分,即听“一问一答”的会话内容作回答。其中分设①“要点选择”、②“内容听解”。“应用练习”和“快乐听练”是为“扩大知识面”和“增强趣味性”而设的。本书除了供大专院校日语专业三年级大学生使用以外,还适用于广大的日语学习爱好者。

第三册的编写虽然未继续得到日本国际交流基金会“Japan Language Education Fellowship Program”的资助,但是参与编写的全体教师仍以一种强烈的责任感,主动、积极地配合主编,利用暑期,对于初步修改过的稿子,认真地进行整理和打印,充分体现了教师积极参与集体科研项目的主观能动性,又一次证明了集体的力量和智慧是多么难能可贵。

参与第三册听力教材编写的人员(按姓氏笔划为序)如下:

王丽薇(第 19 课)            王建英(第 2 课)            刘 杰(第 16 课)

乔颖(第11课)	杜勤(第3课)	沙秀程(第20课)
李道荣(第6、9课)	沈丽丽(第15课)	吴素莲(第5课)
连小燕(第17课)	陆留弟(第1课)	姜晓颖(第7、18课)
高宁(第12、14课)	徐敏民(第4课)	徐海明(第10课)
彭瑾(第8、13课)		

本书最后由主编进行修改、统稿及汇编成册。

《日本语听力》第三册经过(财)日本汉字能力检定协会理事、日本语教育研究所所长、国立国语研究所前所长野元菊雄先生的审阅。

同时,有幸得到长期从事留学生教育、具有丰富经验的日本国私立大学东海大学的鼎力相助,该大学留学生教育中心所长谷口聪人教授对本册教材进行了认真仔细的修改,并给予了热情的指导,本册教材的录音工作也由谷口聪人教授和该校的日语教师中村フサ子和樽田ミエ子担任。在此,我们谨表深切的谢意。

《日本语听力》第三册单词表的编写由王丽薇负责,乔颖汇总打字。本书在编写过程中曾得到日本《文艺春秋》前企画担当部长中本洋先生和本系同仁的热情帮助,在此一并致谢。

另外,本书在整个策划、制作期间,始终得到华东师范大学出版社朱杰人社长、陈朴副社长、陈丽菲副编审以及音像部陈长华主任、赵金土副主任的全力支持,对此表示由衷的感谢!

由于编者的水平有限,本书中的错误和不妥之处在所难免,诚望有关专家及广大使用者批评指正。

**陆留弟**

1999年秋末撰于

明治大学生田 Guest House201

# 目 次

第 1 課	色はいろいろ	1
第 2 課	「一服」多用法を覚えよう	6
第 3 課	擬音語と擬態語には感性あり	11
第 4 課	バックミラーは外国語ではない	16
第 5 課	知恵があふれる慣用語	21
第 6 課	同義語は類義語に含まれるもの	27
第 7 課	流行語は短命なもの	32
第 8 課	すもももももも桃のうち	37
第 9 課	同音異義に気をつけよう	42
第 10 課	プラスに対してマイナス	47
第 11 課	使いこなせない敬語表現	52
第 12 課	語の組合せは好き勝手にはできない	57
第 13 課	副詞も微妙な働き	62
第 14 課	ボディ・ランゲージは無声の言語	68
第 15 課	曖昧語のなかのコミュニケーション	73
第 16 課	挨拶は人より先に自分から	78

第 17 課	金星ってどういうもの .....	84
第 18 課	マスコミの用語と表現 .....	89
第 19 課	季語は俳句につきもの .....	94
第 20 課	ビジネス活動に欠かせないハウ・レン・ ソウ .....	100
付 録		
単語表 .....		107

## 第1課 色はいろいろ



### 問題Ⅰ 聞きましょう。

色名は、一般色名と慣用色名に分かれています。一般色名には、また有彩色と無彩色があります。有彩色は赤、青、紫、黄緑、青緑、青紫、赤紫などで表します。無彩色は、白、真珠、灰色、黒などで表します。慣用色名は、藍、杏色、柿色、鼠色、朱色、黄金色、紺色、ベージュ、ピンク、オレンジ、グレー、グリーン、桜色、ばら色、肌色、象牙色、葡萄色、山吹、青磁色、蜜柑色、牡丹色、桃色など百二十色以上あります。色はいろいろですが、我々の身辺を見回したら、実に豊富多彩な色世界に包まれています。



### 問題Ⅱ 色彩語について、話しなさい。

我々の色世界は、普通、赤、橙色、黄色、緑、青、藍、紫という虹の七色がよく使われています。中国では、色彩語を修飾する表現がたいへん発達しているのではないのでしょうか。たとえば、“紅”(HONG)の前に、“大”(DA)を置いて“大紅”となります。そのほかにも、“浅紅”(QIANHONG)とか、“深紅”(SHENHONG)とか、“淡紅”(DANHONG)とか、“紫紅”(ZIHONG)とか、“菊紅”(JUHONG)とか、“朱紅”(ZHUHONG)とか、“粉紅”(FENGHONG)とか、“火紅”(HUOHONG)とか、“通紅”(TONGHONG)などがあります。



### 問題Ⅲ 次の会話を聞いて、後の問いに答えなさい。

江村：一体言葉で色をどれだけ伝えることができるのか。もちろん、色を表すいろいろな語彙や表現がありますが、特に、われわれ日本人がどう使ってきたのか。その辺のところをぜひお伺いしたいのですが。

佐藤：言葉は人間の表現する道具として、古い時代からあったわけですけど、ただ、色についての語彙は、日本の古代においてはごく限られた数しかなかったと言われていています。つまり、赤、黒、白、青ぐらの表現だけでした。

江村：でも、聞いたところによると、平安時代あたりには、色彩に対する人々の関心はかなり強くなっていたようですね。

佐藤：ええ、そうなんです。たとえば、十世紀の終わり頃に書かれた『源氏物語』という長編小説の中でも、着物の色使いの描写がたくさん出てきます。しかも、それはたいへん細かく、春のいつ頃だったら、上衣の表と裏に、どういう色のあわせ方をしたらいいかということまで、きちんと表現されていました。そして、色それ自体で表現するのではなくて、物の名で表していたのが特徴です。たとえば、淡紫色を“藤”と言ったり、淡紅色を“撫子”と言ったりしていました。和歌の中でも、「花の色」ときたら、すぐに“桜”を意識してしまいますよね。

江村：なるほど。そういえば、現代語の中の肌色や水色、桃色、小豆色、鼠色、茶色なども物の名で表していますね。これは日本独特のものなんですよ。

佐藤：また別に、色彩からきた言葉であっても、必ずしも色覚と対応しないものもあります。たとえば、“火が赤々と燃えている”、“青々とした草原”、“白白と夜が明けた”などは実に生き生きとした様子を表現していると思うんですが。しかし、“みどりみどりとした”とか“黄色黄色とした”とは言いにくいですね。

江村：つまり、言葉の表現にも決まりがあるんですね。

佐藤：ええ、そうなんです。そして、語形上の制約もあります。たとえば、赤、青、緑、紫に対して、赤い・赤み、青い・青みとは言えますが、“緑い”とか、“紫み”などは言えません。だから、言葉の決まりについての勉強もとても大切ですね。

江村：ところで、普段我々日本人の色彩の使い方はどうなっているんでしょうか？

佐藤：それはですね。十何年か前の「日本色彩研究会」と「色彩教育研究会」の共同調査のデータによれば、赤、オレンジ、黄色、緑、紫などの基本色がいずれも高い使用頻度を示していることが分かりました。

江村：日頃、何気なく使っている色彩語だけど、やっぱり虹の七色が多く使われていますね。ただ、不思議なのは“藍”が日本の基本色彩語から抜けているんですよ。

①番 録音を聞いて、正しいものに「○」、間違っているものに「×」をつけなさい。

(a) 「平安時代あたりには、色彩に対する人々の関心がかなり強くなっていたようですね」と言っていましたが、当時のどんな書物に色彩についての描写がたくさん出ていますか。

- 1. 平家物語 (×)
- 2. 竹取物語 (×)
- 3. 源氏物語 (○)
- 4. 宇津保物語 (×)

(b) 「色彩からきた言葉であっても、必ずしも色覚と対応しないものもある」と言っていましたが、次の用法のうち、正しいものはどれですか。

- 1. 火が赤々と燃えている (○)
- 2. みどりみどりとした森 (×)
- 3. 青々とした草原 (○)
- 4. きいろきいろとした畑 (×)

(c) 色彩語の語形上のきまりから見て、次の用法のうち、正しいものはどれですか。

- 1. 青い (○)
- 2. 緑い (×)
- 3. 青み (○)
- 4. 青さ (○)

②番 質問に答えなさい。

1. 古代の日本において、色についてどのようなことばがありましたか。

赤、黒、白、青などがありました。

2. 『源氏物語』の中の着物の描写は、特に何についてたいへん細かいのですか。

色使いについてです。

3. “藤”と“撫子”はどんな色ですか。

淡紫色と淡紅色です。

4. 古代では、色彩を藤とか撫子とか物の名で表していましたが、近い用例として、現代日本語の中にはどんな言葉がありますか。

肌色とか、水色とか、桃色とか、小豆色とか、鼠色と茶色などがあります。

5. “みどりみどりとした”という表現はどうして成立しないのですか。

言葉にはなりにくいからです。

6. 十何年か前に、日本人の色彩の使い方の調査を行ったのは、なんという機関ですか。

日本色彩研究所と色彩教育研究会です。

7. 高い使用頻度を示していた基本色彩語には、何がありましたか。

赤、橙色、黄色、緑、青、紫です。

8. 基本色彩語から抜けていた色は何ですか。

藍です。



**問題 IV** 録音を聞いて、日本の色と一致するものを、番号で( )に書き入れなさい。

- |                 |            |     |
|-----------------|------------|-----|
| (1) PURPLE      | (a) ちゃいろ   | (5) |
| (2) PINK        | (b) だいだいいろ | (8) |
| (3) PALE ORANGE | (c) きみどり   | (6) |
| (4) LIGHT BLUE  | (d) みどり    | (7) |
| (5) BROWN       | (e) みずいろ   | (4) |
| (6) YELLOWGREEN | (f) むらさき   | (1) |
| (7) GREEN       | (g) ももいろ   | (2) |
| (8) ORANGE      | (h) はだいろ   | (3) |



**問題 V** 録音を聞いて、適当なものを、番号で( )に書き入れなさい。

- (a) その人が若くて未熟であること。
  - (b) 企業とか会社などが、卒業の見込みが立たないうちに、学生の採用を決めること。
  - (c) 教えを受けた人が、教えた人より優れ、弟子が師に勝ること。
- (1) 青田刈り (b)
  - (2) 青二才 (a)
  - (3) 青は藍より出でて藍より青し (c)

## 第2課 「一服」多用法を覚えよう



### 問題Ⅰ 聞きましょう。

ものを数える時に、数の後につける言葉を助数詞という。本なら一冊・二冊・三冊、パソコンなら一台・二台・三台、薄っぺらな物なら一枚・二枚・三枚、日なら一日・二日・三日、月なら一か月・二か月・三か月などのように、ものによってそれぞれ違った助数詞を付けることになっています。人を数えるには、一人・二人・三人と一名・二名・三名。猫、鼠、魚、虫、蛇、蝸牛といった動物を数えるには一匹・二匹・三匹。象、ライオン、熊、馬、牛、鯨などを数えるには一頭・二頭・三頭。鳥と兎を数えるには一羽・二羽・三羽となります。

ついでに、刀は「一張り」、相撲の勝負は「一番」、舞は「一差し」などの呼び方もあります。



### 問題Ⅱ 助数詞について、話しなさい。

中国では、助数詞のことを「量詞(liangci)」と言います。使われている字自身は日本語とさほど大きな違いが見られないけど、同じ物には違う助数詞、或いは同じ字でも違う物に用いられることがしばしばあります。たとえば、日本語の「枚」は薄く平たい物に使いますが、中国語では、「一枚硬幣」(コイン一枚)とも言いますし、「一枚导弹」(ミサイル一枚)のような使い方もあります。また、「本」なんかは日本語のように細長い物に使うのではなくて、書籍などを数える時に使います。



### 問題Ⅲ 次の会話を聞いて、後の問いに答えなさい。

先生：先週は、日本人の好きな数字と嫌いな数字について、少しお話をしましたね。さて、今日はちょっと角度を変えて見ていきましょう。ええと、今日は、数を数える時に数の後に付けて、対象のあり方をはっきりさせる助数詞についてです。これにもさまざまな種類があります。たとえば、「一走りしてこい」の「走り」や、「二抱えの木」の「抱え」などまで入れるとややこしくなりますから、今日は、主に漢語に由来した助数詞を取り上げてみましょう。

学生：漢語に由来した助数詞というと、よく使われている「本一冊」とか、「コーヒー一杯」などのようなものですか。

先生：ええ、これらの助数詞は時代によって、言葉も違えば、発音も用法も違います。そして、全部が全部中国から伝えられたというわけでもなく、日本で創られたものもあります。たとえば、梅一輪の「輪」や、一口三千円の「口」なんかは、いずれも中国にはない言い方です。また、「一服」という言い方は、中国では薬に使われますが、日本では、薬以外にも、たとえばお茶を飲む時にも使われますね。

学生：先生、そういえば、この間、千利休が書かれた「一宿泊茶一服申度候」という文章を見たことがあります。

先生：そう、室町時代には、すでに道を行く人々に休憩がてら、お茶を一服させるための茶屋があって、かなり繁盛していたようですよ。「薩摩守」という狂言の中では、都見物の僧が登場して、「ことのほか、喉が乾くが、茶を一ふく馳走になりたい」という一節もあります。ところで、お茶はいつ日本に入ってきたか、知っていますか。

学生：鎌倉時代の初めごろ、中国から伝わってきたと聞いています。

先生：そうですね。ただ、当時の資料では、お茶を飲むことを「喫す」と言っていたようです。中国も当時は同じだったけど、いまは「かっちや」(喝茶 hecha)と言ってますよね。

学生：じゃ、先生、「服」という語はもともとどういう意味だったんですか。

先生：「服」という語は、昔は動詞として用いられて、「ふくす」と読んでいました。『源氏物語』の中に、「月ごろ風病重きに堪へかねて、極熱の草薬をふくして」という一節があります。つまり、古代では「服」は薬剤について用いられていたんです。このような実例は、中国では七世紀ごろの資料にすでに見られます。それに対して、日本は、明治時代の講談資

料に「殿様は奥方に薬一服も煎じて飲ませません」というのがあります。

学生：先生、「一服」といえば、また「タバコを吸う」とか「一休みする」場合などにもよく使われますね。

先生：そうそう、思い出しました。樋口一葉の『にごりえ』では、若い遊女の二人の様子を「やがて雁首をきれいに拭いて一服すってポンとはたき」と描写していたのを読んで、実に色っぽい感じがしましたね。

①番 録音を聞いて、正しいものに「○」、間違っているものに「×」を付けなさい。

(a) 日本はいつ頃から茶屋が繁盛していましたか。

1. 明治時代 (×)
2. 室町時代 (○)
3. 鎌倉時代 (×)
4. 平安時代 (×)

(b) 「一服」の「服」という助数詞は、中国では、昔から主に何に用いられていましたか。

1. 衣服 (×)
2. お茶 (×)
3. 薬 (○)
4. タバコ (×)

(c) いま、日本では「一服」という語は主にどういうところに使われていますか。

1. コーヒー (×)
2. タバコ (○)
3. 一休み (○)
4. お茶 (○)

②番 質問に答えなさい。

1. 会話の中に出てきた「ややこしい助数詞」というのは、何と何でしたか。

一走りと二抱えです。

2. 会話に出てきた助数詞で、中国語で使われていない助数詞は何ですか。

梅一輪の「輪」と一口三千円の「口」です。

3. お茶が中国から伝わってきた当時、飲むということを何と言っていましたか。

「喫す」と言っていました。

4. 「服」という語は、日本では何と読んでいましたか。

「ふくす」と読んでいました。

5. お茶はいつ頃、中国から日本に伝わってきましたか。

鎌倉時代の初めごろです。

6. 日本では、いつ頃から「一服」の「服」という助数詞が薬剤に使われはじめましたか。

明治ごろです。

7. 『にごりえ』では、遊女のどんな様子を描写していましたか。

タバコを吸う様子です。

8. どんな描写から、遊女の色っぽさが感じられましたか。

「一服すってポントはたき」というしぐさから



**問題 IV** 録音を聞いて、次の熟語の説明として合っているものを選び、その番号を書き入れなさい。

(1) 一つの事をして同時に二つの利益を得ること (a) しくはっく (3)

(2) たくさんあっても安い値段にしかならぬこと (b) いっせきにちょう (1)

(3) ひどく苦しむこと (c) にそくさんもん (2)

(4) 一人で数人分の働きがあること (d) さんめんろっぴ (4)